

## 土から焼き物へ

### 焼成体験を取り入れた陶芸実践の紹介

岡崎女子短期大学 講師 本田 郁子



はじめに

筆者は保育者養成校で幼児造形を指導していますが、学生指導をしていて時々気になることがあります。それは学生達が、既製品や半製品を多用して短時間で見栄えが良くて完結する造形遊びや作品作りをしたりする傾向があることです。ものづくりの楽しさは成果物だけでなく、その過程にあることは言うまでもありません。現代では様々な材料や特殊な機器を安価に手に入れることができます。楽しさを知るきっかけとして、ある程度準備されて整えられた材料や設備で作るのも良いと思います。しかし、自分自身で手間暇かけて作りあげていくと、例え少し不格好な出来栄であったとしても、でき上がった時の喜びはひとしおです。そういった体験はものづくりの楽しさを伝える上では必要ではないかと考え、学生や子ども達に素材から作ったり原始的な方法で作ったりする実践を提案しています。

土から焼き物へ

子どもから大人まで幅広くものづくりの楽しさを伝えたいと思い、筆者の専門である陶芸を活かして大学での授業で焼き物制作を取り入れたり、子どもや一般向けに陶芸体験を行ったりしています。その中で、素材の変化を感じることができる陶芸体験として「野焼き」や「七輪陶芸」を取り入れています。一般的な陶芸体験では、受講者は粘土成形、絵付けなどを中心に行い、焼成は講師や専門の業者に任せて、数週間後に焼きあがった作品を受け取ることが多いと思います。受講者は土が焼き物になっていることに嬉しさを感じる一方で、まるで魔法の様に焼き物になったと感じるのではないのでしょうか。筆者自身そのような陶芸の授業や講座を実施してきましたが、陶芸の楽しさを十分に伝えることができているか疑問を感じるようになりました。陶芸の魅力は様々ありますが、土が焼き物に変化することもその一つだと思います。筆者自身大学で陶芸を学び、当初は器が自分で作れることに楽しさを感じましたが、焼き物の面白さを改めて感

じた印象的な授業がありました。それは焼き物を材料から焼成までできる限り自分たちで作るという内容でした。まずは大学の構内で材料になりそうな土を探して掘り、粘土と石に分けて陶土と釉薬を作り、野焼きや耐火煉瓦を組んで小さな窯を作って焼成しました。野焼きでは粘土が焼き物に変化していく様子をじっくりと観察することができました。作品は素朴で焼きむらに趣のある焼き上がりとなりました。この経験から焼き物の成り立ちを改めて知る楽しさや、先人の英知の上に現在の焼き物があることを実感することができ、ますます陶芸の面白さや奥深さを感じることができました。

### 保育者養成校での実践

筆者のゼミ授業では例年焼き物制作を行っています。マグカップや小皿、箸置きなどの器を作り、焼成後は自作の器を使ってお茶会をして楽しむ、という内容です。その中で、素材から作ることや素材が変化する楽しさを伝えたいと思い、陶芸窯で焼成する方法に加えて七輪で焼成する方法を取り入れています。実際に授業で実践した七輪陶芸の方法と、学生の様子や学びを紹介します。

#### ■ 七輪陶芸とは

陶芸窯の代用として七輪で焼成する方法です。作品の大きさは七輪に入るまでと制限はありますが、素焼き（800度程度）から本焼き（1250度程度）まで行うことができます。主な七輪陶芸の特徴は以下です。

- ①高価な陶芸窯の代用として安価で入手しやすい七輪で焼成できる。
- ②通常は素焼き 7 時間、本焼き 12 時間程度の焼成時間に加えて冷却時間が 1～2 日必要だが、素焼きから本焼きまで 2～3 時間で完結する。
- ③野焼きは屋外の広い場所を必要とするが、屋外の軒先など、さほど広くない場所でも焼ける。
- ④焼成途中の作品の様子を観察することができる。

#### ■ 主な道具

道具：七輪 2 個、焼き網 1 枚、ドライヤー 1 台、フライパンやスチール缶 1 個（蓋付きが望ましい）、ライター 1 個、火ばさみ、軍手、皮手袋

#### ■ 主な材料

材料：陶土 1～2 kg（ふるいにかけて川砂を外割重量 10%ほど混ぜ込んでおく）、木炭

1～3 kg、新聞紙や木材適量

■ 作り方

①成形:掌に収まる程度の大きさ、5~10 ミリ程度の厚みで成形する。細かな細工は避け  
た方が破損しにくい (写真1)。



写真1

②乾燥:数日間自然乾燥をする。

③火熾し:七輪の中に炭、新聞紙、木材を入れて送風しながら炭に火を点ける (写真2)。



写真2

④素焼き:七輪に焼き網、フライパンを乗せ、作品を入れる。蓋をして途中裏返しながら  
30分から1時間かけてゆっくり温める (写真3)。色が変わってきたら作品を焼  
き網に直接乗せて30分程焼成する (写真4)。



写真3



写真4

- ⑤本焼き：炭を足して、その上に作品を乗せる。もう一つの七輪を上から被せて15分程度焼成する。次にドライヤーで下の送風口から送風して加熱し、途中焼き具合を確認しながら5~15分程度焼成する（写真5）。上に被せていた七輪の中に入れてゆっくり冷まして完成である（写真6）。



写真5



写真6

### 学生の学び

学生達は火熾しの経験が少ないので、なかなか炭に火が点かずとても苦心をしていました。しかし、木材を鉋で割ることを楽しんだり、団扇で送風したりして、工夫しながら火が熾った時は達成感で喜んでいました。素焼きではじっくりと焙りながら時間をかけて焼くので待ちきれない様子もありました。焼成途中では粘土の色を観察したり、器体を叩いて音の変化を聴いたりして、焼けているのかを確認していました。本焼きでは炎の熱さや、作品が高温になり白く輝いている様子に驚いていました。焼成後の作品は、色むらが

あったり、ひびが入ったりしましたが、部分的に自然釉が降りかかり薪窯で焼成したような風合いになりました。学生達は火熾しや火加減の難しさを感じながらも、焼き物を自分で焼いた事に満足感を得たようで、焼きあがった作品を大切に手にしていました。学生の振り返りからは、成形時に空気を抜くことや、素焼きではゆっくりと温度を上げることや火加減の重要さに気付きがあり、自分自身で火加減をしながら焼くことで焼き物づくりの重要なポイントを学ぶ事ができていたと考えます。

#### まとめ

七輪陶芸は難しそうだと感じるかもしれませんが、土を焼くという単純な工程です。また、「土を焼くと焼き物になる」、これこそが焼き物作りの本質です。現在、焼き物は陶芸窯を用いて電気やガスなどを燃料に効率良く焼成されます。文明が進み便利になることは素晴らしいことだと思います。しかし、時には原始的な方法に立ち戻って作ることを体験すると、その物の成り立ちを知る事ができ、本質に触れることへの感動を得たり、改めて文明の素晴らしさを感じたりする機会になると考えます。



七輪陶芸をするゼミ生達の様子

参考文献 吉田明 (2002)『自分で焼ける 何でも焼ける 決定版 七輪陶芸入門』主婦の友社